

【会長賞①：中学生の部】

「にいに（兄）」

宮城県・仙台市立西多賀中学校
1年 末永 聖空 さん

「にいに」私は、兄をこう呼んでいる。小さい頃から変わらない呼び方だ。

私には、高校一年生の兄がいる。兄は、自閉症という障害を持っている。人との関わりをとることが苦手とされる障害だ。初対面の人と話をする時、緊張している時、言葉が詰まってしまう。でも兄はいつも必死で言葉にしようとする。

私は、母から兄の障害について聞いた。兄は、周りの子に比べると、言葉が始めるのが遅く、両親はとても心配したそうだ。時間はかかったが、言葉を片言でも話せるようになって、とても安心したということだ。

兄は、小学生の頃、些細なことで怒ったり、言われたことを気にしすぎている。「またそんなことか。」

そう思うこともよくあった。しかし、根がひょうきんな兄は、よく私と悪ふざけをして遊んでくれたり、私が泣いている時、優しく頭をなでて、慰めてくれたりする。また、兄は力持ちで、力仕事を頼むと、喜んで引き受けてくれる。こんな面白く、優しく、頼りがいがある兄が、私は大好きだ。

そして兄は、中学校三年生の時、福祉に興味を持ち始め、「将来、福祉関係の仕事に就きたい。」という夢があった。兄は、その夢に少しでも近づくため、三年間寮制で、自宅からも遠いが、やりたいことができる学校を選んだ。

しかし、受験の時、兄は面接で大分、苦勞した。話をすることに、不安を抱えていた兄にとって、それは大きな困難だったに違いない。それでも、目標とする夢があったことが努力する励みとなり、見事、受験に合格した。

私は、兄と離れるという寂しさが少しあった。それでも大いに嬉しかった。もちろん兄も嬉しかっただろう。私はこの時、目標を達成する尊さを、兄から学んだ。やりたいことを見つけて、それに向かって努力することがとても大切なのだと思うようになった。

兄は、受験を通して成長することができたと思う。話をすることに不安を抱えていた兄が、話をすることに嬉しさと、楽しさを感じていた。兄をそうさせたのは、面接の練習の時、また、それに限らず、周りの人が話を最後まで聞いてくれたことが、自信になり、成長につながったのだと思う。

私は、兄から学んだことがある。それは、障害があっても、なくても違いはな

いということだ。生まれた時、中には、病気を持って生まれた人、障害を持って生まれた人、何らかの問題を抱えて生まれてくる人も、少なくはない。でも、みんなが命を授かっている。たとえ話をすることが苦手でも、何かを伝えたいという気持ちに変わりはない。また、やりたいことがあれば、誰だって努力できる。そして、自分の力でやりとげる力は、誰もが持っている、私は信じている。

だから、どんなことにも、あきらめず挑戦して、たくさんの経験を積んでほしい。多くの経験と努力が、自分で、自分の未来を切り開くための、手掛かりになると思う。

私は、障害があっても、頑張る兄の姿を見て、特別支援学校の教師になりたいと思った。私は夢を持った。だから兄を見習って、努力していきたい。そして、兄が味わったような充実感を、いつか私も味わいたい。大変なことはあるかもしれない。しかし、

「障害があっても、懸命に頑張る障害者を応援していきたい。」

という私の気持ちに変わりはない。

「にいに、これからも頑張れ。」